

国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞新しい世界のことばとしての漢字表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2017-03-15 キーワード: 作成者: 齋藤, 希史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000929

講演 新しい世界のことばとしての漢字表現

齋藤 希史（東京大学教授）

はじめに

今、田中先生のご講演で、漢語が近代になって一気に増え、それがだんだん日本語のなかに落ちていく、溶け込んでいくというお話をされました。私はその前段階、つまり、漢語がどのようにして、近代のはじまりに増えたのかをお話しさせていただきたいと思います。たとえば田中先生のお話にも「活躍」が翻訳語ではないかという大変示唆的な指摘がありました。このように漢語の増大の背景として翻訳があること、それが具体的に漢語の増大にどうかかわっているのかを中心といたします。

まず、翻訳と言うと、漢文の訓読も翻訳と言えは翻訳ですが、これは文字をそのままにしています。漢字はそのままにして、それをどう読むかという翻訳です。しかし、ヨーロッパ語から日本語への翻訳とはちよつと違います。文字そのものが変わります。アルファベットから日本の仮名とか漢字に変えていくわけです。それは、漢文を読み下すなり、書き下すなりするのは大きく異なる翻訳です。その意味で、多くの日本語話者にとってヨーロッパ語との出会いは、漢文との出会

いは違った翻訳という営みを要請したということになるかと思えます。

その翻訳のなかで近世になって最初に広く行われたのはオランダ語からの翻訳です。長崎における貿易のための通訳だけではなく、いわゆる蘭学がさかになるにつれて、オランダ語からの翻訳も多く行われるようになりました。では、その翻訳に使われた日本語文はどのようなものだったのでしょうか。オランダ語はどのような日本語に翻訳されたのでしょうか。

と言いますのは、近代以前の日本語には、さまざまな文体があつて、その使用範囲や内容によって、使い分けがなされていたからです。現在のように、基本的には漢字平仮名交りの口語体が用いられているのは状況が異なっていました。



齋藤 希史

京都大学大学院文学研究科博士課程中退。
京都大学人文科学研究所助手、奈良女子大学文学部助教授、国文学研究資料館助教授を経て、2012年より現職。
専門分野：中国古典文学・漢字圏の言語と文化

そうした文体の違いに着目しながら、蘭和辞典から英華辞典へ、古典漢語から近代の学術漢語へと二つの流れを軸に、新しい世界のことばとしての漢字表現についてお話したいと思います。

一・蘭学の翻訳

a. 『解体新書』(一七七四)

『解体新書』をご存知の方は多いと思います。オランダ語の医書『ターヘル・アナトミア』を杉田玄白(一七三三〜一八一七)・前野良沢らが翻訳したもので、現物を見れば一目瞭然ですが(図1)、漢文で訳されています。『解体新書』は、オランダ語から漢文への翻訳、正確にいうと、日本語で翻訳して、それを漢文に直して、つまり漢作文をしたものです。

ではなぜ、漢文で訳したのでしょうか。そのことについて、のちに大槻如電(一八四五〜一九三二)が杉田玄白から聞いた話として、次のように言っています。大意を申し上げますと、「オランダ語の医学を広めたいが、医者たちはみんな、いわゆる漢方を奉じているから、まずその根本、つまり中国から変えないとダメだ。漢文で訳せば、これが中国に伝わる。そうすれば、向こうの医者たちも目を覚ますことができる」と。

言ってみれば、当時の彼らにとっては漢文が知的世界における普遍的な言語であつたわけです。と同時に、ここにはつきりとは書いてはありませんが、古典的な言語でもありました。つまり、漢文には伝統があります。『論語』や『孟子』を挙げるまでもなく、古い書物を学んで、読み書きできるようになるのが漢文です。そして、広がりと言う

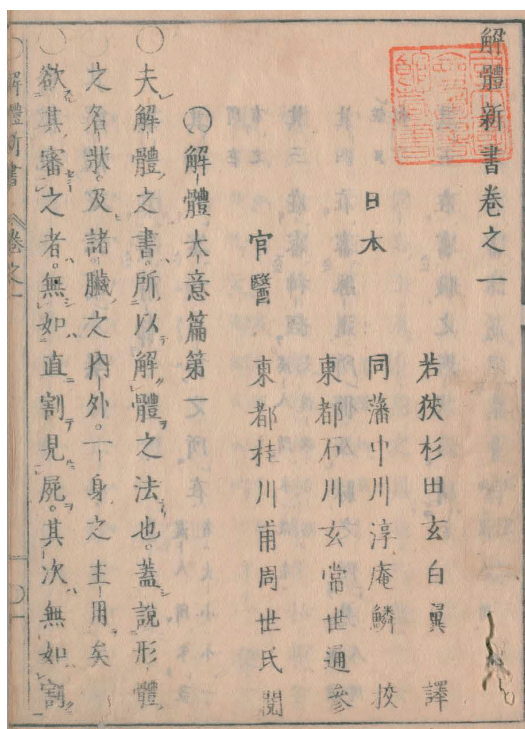


図1 解体新書(国立国会図書館蔵引用)

と、当時の東アジアは漢字漢文の流通圏で、漢文は東アジア全体を覆う普遍的な書き言葉でした。その意味で、翻訳も、一つの基準が漢文に置かれていました。

b. 『和蘭辞彙』(一八五五〜五八)

もう一つ、ヨーロッパ語の翻訳は、中国が先行していました。中国にやってきた宣教師たちがさまざまな書物を、当然、『聖書』も含まれますが、漢文に翻訳しています。それが日本にはいつてきたという流れがあります。その意味で、今風に言うところグローバルと言うのでしょうか、翻訳の言語は漢文であつたと言うことができます。

ところが、当時のオランダ語と日本語の対訳辞書『和蘭辞彙』をよく

見ると(図2)、漢文ではなく漢字片仮名交じりで訳されています。そして、その漢字片仮名交じり文が漢文の読み下し風かと言うと、そうではありません。たとえば、図2の最後の行に「仕癖ハ二番目ノ性質ナリ」とあります。今だと、「習慣は第二の天性なり」と訳すところではないでしょうか。『広辞苑』などの辞書にも、「習慣は第二の天性なり」という成語として掲げられていると思います。また、今の私たちは、この「仕癖」という言葉は、普通は使いません。「習慣」のほうが一般的です。これはどういうことなのでしょう。

当時、「仕癖は」という訳語の世界が一方ではありました。これは、古典と通俗で分けるなら、通俗的なことばにあたります。この蘭日辞典は、長崎の通詞たちが中心になって訳していますので、漢文風より、彼らが日常交わす書きことばの世界により近いことばが使用されていると考えられます。

「仕癖ハ二番目ノ性質ナリ」は、オランダ語のことわざのようなものを訳したのですが、漢文の世界にも同じようなことばがあります。「習与性成」です。「ならいせいとなる」と、だいたいは訓読するかと思っています。これは『尚書』という中国の古典に出てきます。また、「習慣若自然」、「習慣は自然のごとし」ということばもあります。こちらは『孔子家語』という書物が出典です。『尚書』は押しも押されしない五経のうちの一つですし、『孔子家語』も、孔子の言行や逸話が書かれていますから、よく読まれていました。漢籍のなかにもこのように対応する文章があるにもかかわらず、わざわざ「仕癖ハ二番目ノ性質ナリ」と訳しているところが興味深いのです。

ところが、現在は、むしろ漢文に近いようなことばで私たちは理解

しています。つまり、古典的な訳と通俗的な訳の二種類があり、現在はどうも古典漢文的な訳のことばを受け継いでいると、ここから判断できそうなのですが、結論を急ぐ前に、もう少し詳しく見てみましょう。

c. 漢文の修辭

ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』(二七一九)のはじめの日本語訳は、オランダ語からです。黒田麴廬という洋学者によるもので、英語からではありません。また、この翻訳には、オランダ語から訳した草稿が残っています。その原稿を照らしあわせると、どのように翻訳の文章、訳文を練り上げていったかがわかります。ご覧いただきたいのが、図3です。四行目に「瞽者ノ杖ヲ失ヒ暗路二燭ノ滅ル如シ」とありますが、草稿には「渡二船ナキ如ク」と書かれています。「渡二船ナク」は、さきほど見たようなオランダ語と日本語の対訳辞書の文体です。漢文よりも日本語に近い文体です。それに対して、「暗路二燭ノ滅ル如シ」は非常に漢文的です。

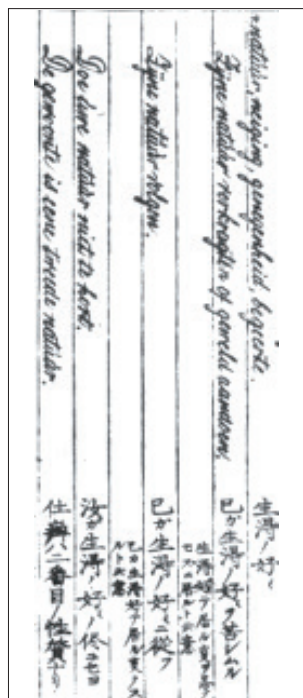


図2 和蘭字彙(『和蘭字集』早稲田大学出版部, 1974 引用)

福沢諭吉(一八三五―一九〇二)

は、こうした現象を見て、これは洋学者たちが装いを凝らしたかった、つまり、漢学者に對抗したかったからだろうと言います。通俗的な文体では漢学者に軽んじられかねない。漢文的な言葉を使っただろうが見栄えはよくなる。そのため苦勞して漢語を用いて翻訳をしたのだと言うのです。

「江戸の洋学社会を見るに、著訳の書、固より多くして何れも仮名交じりの文体なれども、動もすれば漢語を用いて行文の正雅なるを貴び、之が為めに著訳者は原書の文法を讀碎きて文意を解するは容易なれども穩当の訳字を得ること難くして、学者の苦みは専らこの辺に在るのみ。其事情を丸出しに云へば、漢学流行の世の中に洋書を訳し洋説を説くに文の俗なるは見苦しとて、云は、漢学者に向て容を装うもの、如し」〔福沢諭吉「福沢全集緒言」一八九七〕

確かにそうした側面もあるかもしれません。つまり、漢学者への對抗のために、通俗よりも古典を重んじるような傾向が洋学者にあったということです。福沢は、それが明治期における漢語の氾濫の原因であると考えているようですが、しかし、私はそれだけではないだろうと思っています。それが次の『英華辞典』の到来、第三の漢字語という視点です。

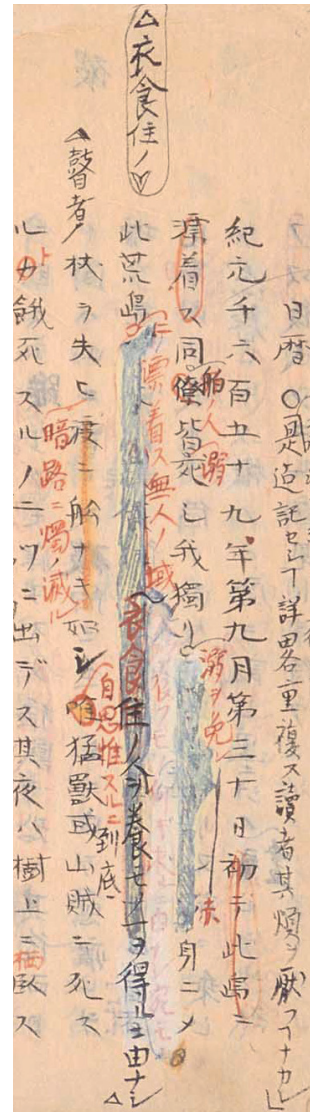


図3 『魯敏孫漂荒紀事』(京都大学附属図書館蔵引用)

二. 『英華辞典』と近代学術用語

a. 『英華辞典』の奔流

ここで一つ、小さいことのように見えて重要なことがあります。オランダ語と漢文の対訳辞書はないということです。もちろん、どこかで作られていたかもしれませんが、印刷物として広く流通しているものはないと思います。ですから、長崎の通詞たちは『蘭仏辞典』をもとにして、オランダ語と日本語の辞書をコツコツと作ったわけです。

ところが、英語に関しては、中国やその周辺にやってきた宣教師たちが英語と中国語の対訳辞書、つまり『英華辞典』をたくさん作っていて、それが日本にどんどん広がってきます。これは大きいことです。

日本でも広く使われた W. Lobscheid (一八二二―没年未詳) の『英華字典』を見ると(図4)、「あれ?」と思われるかと思いますが、前のほうから順に読んでいくと、「規矩」「風俗」とか普通の漢語だなあときて、「幫襯人」、今の中国語で読むと「bang chen ren」という言葉があります。これは中国の俗語です。古典的な漢語しか知らない人には多分わかりません。「幫襯人」の右側に書いてあるローマ字は、広東語と当時

の標準語を発音表記したものです。

見慣れない字もあります。口偏に吾の「唔」は、広東語の方言を表す文字で、広東語の否定辞です。これは普通の漢文の知識ではわかりません。また、口偏に既という字（「嘅」は、今の日本語で言うところの「的」の「的」です。中国語では、「私の友達」は「我的朋友」(wo de peng you)ですが、「的」という字は「の」にあたります。それを広東語だと「嘅」で表します。つまり、この辞典は広州で作られている地域性もあって、そのようなことばがはめこまれているのです。

伝統的な辞書からすれば、かなり乱暴です。古典の經典に載っているような言葉もあれば、口語的なことば、さらに方言的なことばもあります。元来、ことばは、さきほどの田中先生のお話にもありましたように、階層という秩序、層をなしています。その秩序が言ってみれば破壊されています。なんでもありの状態になっています。

もちろん、ここに「習慣自然となる」と古典籍のことばも出ています。そして注意しなければいけないのは、『英華辞典』以前の中国の辞書や語彙集には、必ず出典が書いてあります。たとえば、**図5**は『佩文韻府』^ふという、中国でよく使われていた辞書、というよう

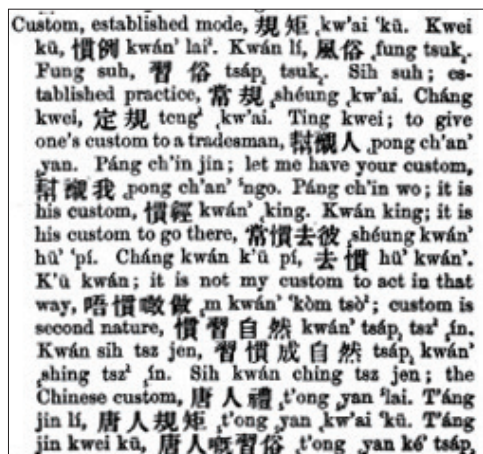


図4 英華字典 (California Digital Library蔵, <http://www.cdlib.org/> 引用)

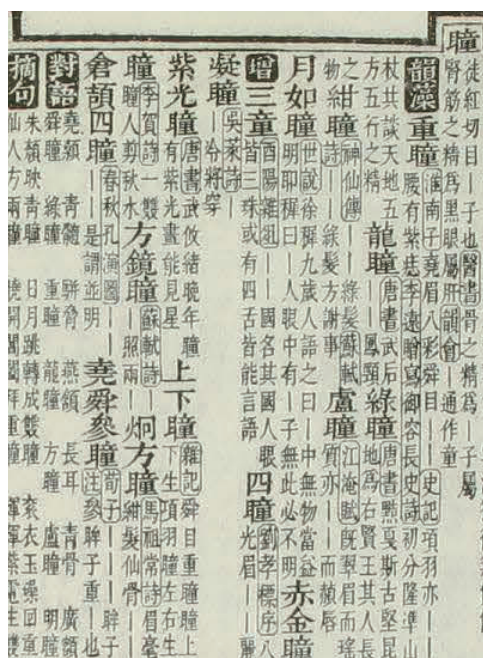


図5 佩文韻府 (齋藤蔵 引用)

り「韻書」と言って、詩に使う言葉を集めた語彙集ですが、ここで四角で囲ってあるのは書名です。「重瞳」という熟語が見えますが、「淮南子」や「史記」は書名で、その下に用例が書いてあるのです。このように必ず出典が書いてあります。ことばに出典があるのは古典語の世界です。翻って、『英華辞典』を見ると、出典がありません。つまり、破天荒な辞書がやってきたわけです。だから、英語がたくさんはいってきたというように、どうしても『英華辞典』については思いがちですが、そうではなく、『英華辞典』は英語と漢語がセットになっています。セットです。しかも、漢語の階層が破壊された状態でやっています。

b. 『哲学字彙』

これが新しいことばを作るエネルギーになります。つまり、古典の

「これは経書のどこそこにあつて」という縛りから、漢語が解き放たれたことになりました。それでどのようなことが起こったのか。たとえば、井上哲次郎（一八五六―一九四四）が明治一四（一八八一）年に東京大学から出版した『哲学字彙』という、哲学というより学術のための英語との対訳語彙集を編纂して、その序文を書いています。興味深いのは、次の部分です（図6）。

まず、これまでの訳語のなかで、これは『英華辞典』も多分含まれていますが、妥当なものを採用したと言っています。さらに、彼らが新たに訳語を定めるとき、『佩文韻府』とか『淵鑑類函』『五車韻瑞』の他にもいろいろな本を使つたと書いてあります。さきほど紹介した『佩文韻府』もありますね。そのため、この序文だけ見ると、当然、私たちは、古典語の流れをくんでいると思つてしまいます。

ところが、たとえば「Coexistence」には「俱有」という訳がつけてありますが（図7）、これは古典とは意味がつかないのです。「俱有」は『俱舍論』に載っていますし、唐の杜甫（七一二―七七〇）の詩にもあると言つて、わざわざ杜甫の詩を引いています。しかし、杜甫の詩では、「学識は皆あつた」という、訓読すると「ともにあり」という意味の「俱有」です。これは「coexistence」ではありません。『俱舍論』も関係ありません。つまり、出典が書いてあるように見えて、これもさきほどの田中先生のお話とも通じると思いますが、外形的な部分は一致しています。なにか典拠らしく載せているのですが、「coexistence」に対応する文字として「俱有」を新たに定義し直しているのです。いったん古典から離れた、ふわふわ浮いていると言うとちよつと語弊があるかもしれませんが、縛りから離れた漢語を、もう

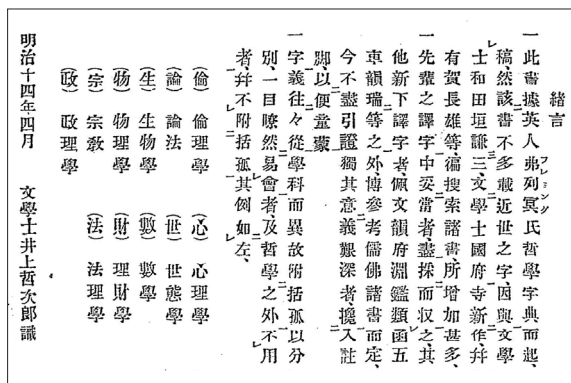


図6 哲学字彙(国立国会図書館蔵 引用)

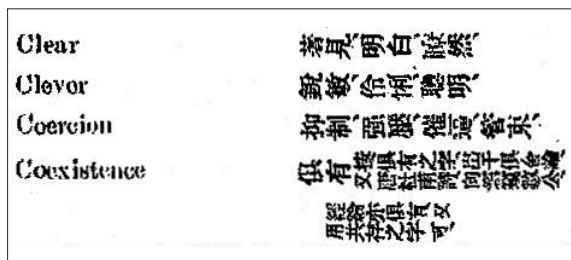


図7 哲学字彙(国立国会図書館蔵 引用)

一回、英語を中心とするヨーロッパ語に結びつけているわけです。その作業が、『哲学字彙』（一八八一）のような語彙集で行われています。

C. 英文漢訳

もう一つ別の例を見てみましょう。中村正直（一八三二―一九二）が東京大学でどんな授業をしたかを報告しています。当時も、成果報告書みたいなものを書かなきゃいけなかったわけで、授業の報告を書いてるわけです。

「毎月大約二三回ハ作文ヲ試ミタリ、ソノ文ハ之ヲ添削シ或ハ評語ヲ加ヘ以テ之ヲ奨励セリ、文題ハ我ヨリ出スコトアレドモ、大抵ハ

学生ヲシテ平日ソノ読メル英書ヨリ一二章ヲ抽キ出シ、漢文ヲ以テ
翻訳ナサシメタリ、コレハ余少シク英書ニ通スルノミナラズ、該学
生固ヨリ英学ヲ可ナリニ能クスルコトナレバ、カクノ如キ課業ハ後
来ニ至リ英漢対比スル訳文ヲ造ルノ特ニ補益アルベシト思ヘルナリ、
又目今ノ利便ニモ漢文ヲ作りナガラニ英文モ細読シ訳語ヲ考求シ得
ベク、功力分レズシテ一挙兩得ノ益アルベシト思ヒタルガ故ナリ、
学生モコノ挙ヲ喜ビ、勉強シテ従事セシカバ一学年ノ終ニハ大ニ進
歩ヲ見ハシ、余ガ意ヲ満足ナサシメタリ」〔中村正直「年報」(「東京
大学第一年報」起明治十三年九月止同十四年十二月)〕

これからわかるように、英語を漢文で翻訳させています。漢作文を
やらせているわけです。もともと漢文を作文するのは、古典籍を読ん
で、漢籍を読んで、読みぬいて、文章を作ることです。韓愈(七六八
〜八二四)や柳宗元(七七三〜八一九)の文章を読んで、漢文を作るの
がまっとうなやり方です。古典に基づいているわけです。

ところが、中村正直は、もともと昌平坂学問所で漢学を修め、イギ
リスに行つて英語ももちろんできた学者ですが、英語を漢文に翻訳し
ろというわけです。ベースとなる言葉は、古典ではなく英語に置き換
わっているんですね。そういうかたちでの漢文という意識がここに出
ています。これは大変に興味深いことです。

三. 新しい世界のことば

a. 『西国立志編』(一八七〇〜七二)

中村正直が翻訳した『西国立志編 原名自助論』という明治期の大ベ

ストセラ―にも、「習慣ハ第二ノ天性」として「人ノ品行ハ、善キ習慣
ノ力ニ頼ルコト、細々ナラズ、故ニ善キ習慣ヲ養ナヒ長ズレハ、善ニ
進ミ、惡ニ遠ザカル為ノ大裨益トナルナリ、常言ニ曰ク、人ハ習慣ノ
一塊肉ニシテ、習慣ハ第二ノ天性ナリト、」(第十三編)と出てきます。

And here it may be observed how greatly the character may be
strengthened and supported by the cultivation of good habits. Man,
it has been said, is a bundle of habits; and habit is second nature.
(Chapter XIII)

「習慣ハ第二ノ天性ナリ」の英文は「habit is second nature」です。中
村の言う「習慣」というのは、さきほどあげた『孔子家語』にでます
から、それを出典としてもよいはずですが、ここはそういうことではな
く、英語に対応するものとして出てきています。『西国立志編』出版以降
の多くの読者にとって、「習慣ハ第二ノ天性」は中国の古典を思い出させ
るものではなかったでしょう。つまり、このSamuel Smiles(一八二一〜
一九〇四)の『Self Help』(一八五九)の『自助論』が、中国の古典に代わっ
て、出典としてすりかわった、置き換わったと考えることができます。

そして、私たちが『日本国語大辞典』やいろいろな辞書で「習慣」を
引くと、「習慣は第二の天性ナリ」がでています。近代日本語になつて
いるわけです。このような流れがあることが見えてくるかと思ひます。
そうやって作られた漢語が、私たちの世界でどのような新しさを
持ったかということについて、さらにお話ししたいと思います。

b. 科学のことば

さきほど、『哲学字彙』が学術用語の翻訳語彙集であつたとお話しし

ましたが、やはり、新しいヨーロッパの学問、とりわけ自然科学の導入は、それまでになかった知識を日本列島という空間にもたらしめた。その訳文、翻訳の文章がどうなっているか、ちょっと見てみたいと思います。

Archibald Geikie (一八三五―一九二四) というスコットランドの自然地理学者が、自然地理学についての初歩的な教科書、『Elementary Lessons in Physical Geography』を一八八六年に著しています。この Geography を当時は「地文学」と訳していました。『藝氏地文学』という書名でも訳されていますが、「藝氏」は、Geikie のことです。

面白いことに、同じ年に訳本が二種類出ています。で、微妙に違います。

「雲昇騰シテ大気ノ上層ニ至リ、恆風界中ニ入レバ、飛龍ノ勢ヲ以テ、千里ニ行流スルコトアリ、春日好風ノ候、仰ギテ天ヲ見レバ、白雲ノ大空ヲ飛行スル影ノ、大地ヲ急遽スルコト速ナルアリ、試ニ此速力ヲ測量スレバ、一時間ニシテ三四十里ヲ急飛スルモノアルベシ、又雲形ヲ視ルニ、或ハ蒼狗ノ如ク、或ハ龍鱗ノ如、故ニ其大ナルハ、山嶽ノ如シ、其細微ナルハ、春水ニ似タリ、蓋シ雲原ト無心ナリ、而シテ斯ノ如キ形状ヲ呈スルハ、前段ニ所謂大気ニ不斷ノ流動アルニ因ルナリ」[富士谷孝雄訳補『中学校師範学校教科用書 藝氏地文学』(文部省編輯局、一八八七)、第十章「大気の乾湿」]

「第廿二節 雲若シ上層ノ気流中ニ生ズルカ又ハ上昇シテ之ニ漂到スルトキハ偉大ナル速力ヲ以テ長大ノ距離を延單ス東風遅々春光駘蕩ノ時ニ在リテハ其歩頗ル緩慢ナルカ如シト雖トモ亦其陰影ノ岡原上ヲ通

過スル速力ヲ以テ之ヲ考フルトキハ其速力ハ一時間二十八「マイル」乃至百二十「マイル」ノ割ナルヲ知ルナリ地上ヨリ之ヲ望見スレハ其動揺時々廣狭ヲ變ジ互ニ上下回轉シテ小大窮リナク以テ大気ノ中ニ不朽ノ運動アルコトヲ証明ス」[志賀重昂校閲・島田豊訳述・三浦應訂校『地文学』上(共益商社、一八八七)、第十章「空氣の湿氣」]

原文は次のようになっています。

22. When clouds enter or are formed in one of the upper steady air-currents they are borne along, sometimes for great distances and at a great rate. On a breezy spring day, they may be seen sailing across the sky at what may seem a leisurely pace, which, however, by the rate at which their swiftly-moving shadows fly across hill and plain, is proved to be sometimes more than 80 or even 120 miles an hour. They can be watched continually changing shape and size as they move along, rolling in huge folds over each other, sometimes lessening and sometimes increasing, and in all these movements testifying to the ceaseless turmoil of the atmosphere in which they are suspended.

ちなみに、上の富士谷孝雄は当時の東京大学の先生で、教科書として訳しています。もう一つの島田豊は英語の翻訳家で、いろいろな本を訳しておられます。両者の訳文を見ると、前者は、なんとなくか漢文のようで、たとえば、前者は「飛龍ノ勢ヲ以テ」、後者は「偉大ナル速力ヲ以テ」としています。英語では、「飛龍」とあるので「ドラゴン」と書いてあるのかしらと思って見ても、「ドラゴン」は当然でてきません。つまり、富士谷先生は漢文調で訳し、島田さんは、どちらかと言えば直訳調で訳しています。



細かく見ていくと、明治期では、大量の翻訳語を導入して、漢字片仮名交じりの文語体を駆使しながら、さまざまな言葉の空間を作っていたことがわかります。古典から離れた漢語を自由に使う過程で、あえて古典語に近い格調を求めることもありました。一方で、できるだけ直訳的な、英語を想起させるような文体で書くこともありました。それは必ずしも一枚岩というか、一つのトーンではありません。直訳調のなかにも、漢文的な言い回しはいつています。いろいろな偏差、バリエーションがあります。そのようなさまざまな文体が試されるなかで、近代の新しいことばの空間ができたということではないでしょうか。そしてそこには科学の翻訳のことばが、意外に大きな位置を占めています。

C. 空気・大気・雰囲気

科学のことばが、私たちの日常語にはいつている例を、最後にお示ししたいと思います。

さきほどの原文を見てお気づきになられたでしょうか。「*atm.*」という単語を、上の例では「大気」と訳し、下の例では「空気」と訳しています。「大気」と「空気」です。

ここには出ていませんが、「*atm.*」ではなく「*atmosphere*」には、当時三つの訳がありましたが、多くは今でも「空気」を使いますが、「空気」と「大気」と、もう一つ「雰囲気」です。今私たちは、「雰囲気」は科学用語としてはごく稀にとい

うか、使っている科学の論文はないわけではありませんが、一般の人にとって科学用語であるより、むしろ日常の言葉です。「この店は雰囲気がある」とかです。それに対して、地球の周りを覆っているのは「大気」ですよね。「この店には大気がある」とは言わず、「この店には雰囲気がある」と言います。また、「地球の周りは雰囲気で覆われている」とはあまり言わないですよ。しかし、明治の初年、幕末ではそのような言い方をしていました。「雰囲気」は、科学の言葉から生まれているのです。青地林宗（一七七五～一八三三）の『気海観瀾』（一八二七）には「雰囲」とあります。

「地球為氣海中之一大体、亦有所自發之氣、周圍其外、此謂之雰囲。
「*atm.*」雰囲之低処、即是地面」

これは地球の大気というか周りのことです。そこにあるのが、「雰囲」なわけです。この「雰囲」の低いところが地面だということです。

また、明治になってから、小幡篤次郎（一八四二～一九〇五）という慶応の人の『博物新編補遺』（一八六九）に「雰囲気論」があり、そこには「世人常二空氣ト唱ヘ学者之ヲ雰囲氣ト名クル一種ノ氣狀アリテ地球ノ全周ヲ包メリ」、つまり、「これは一般には「空気」というが、学者は「雰囲気」という」と書いてあります。つまり、純然たる科学用語として「雰囲気」は登場したんですね。

これもさきほどの田中先生のお話に通じるといえますけれど、いろいろな脈絡があつて、最終的に私たちは「空気」と「大気」と「雰囲気」とをそれぞれ違うように使い分けていますが、そこに至るまでには、こうした言葉のドラマがいろいろあったということで、私のお話はここで閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。